

コロナ禍でのフィールドワークにおけるオンライン・ コラボレーションツールの活用について

澤 村 雅 史*

(2021年11月30日 受理)

The Effective Use of Online Collaboration Tools for Fieldwork: A Proposal from the Experience under Covid-19

Masashi SAWAMURA*

This study reports on how online collaboration tools and other ICT tools helped students to overcome the effects of COVID-19 and achieve significant results during peace studies fieldwork in Hiroshima in 2021 and suggests on the possibility that ICT tools can enhance the fieldwork experience to make greater achievements in Post-Corona world.

Keywords: Atomic Bomb 原爆, Peace Studies 平和学習, DX in higher-education 高等教育におけるDX (デジタル・トランスフォーメーション), ICT and Collaboration tools ICTコラボレーションツール

1. はじめに

本稿では2021年8月4日(水)～7日(日)に行った広島女学院大学(以下本学)夏期集中講義「ヒロシマと平和」の実践を例に、コロナ感染対策下でのフィールドワークにおける制約を、ICTツール(なかでもインターネットを介して意思疎通や共同作業を可能にするコラボレーションツール)の活用によって補い、従来に増して創造的な学びの機会を実現しようとした試みについて報告し、新たな学びのかたちの模索に向けた提言を行う¹⁾。

2. 「ヒロシマと平和」について

夏期集中講義として開講される「ヒロシマと平和」は、本学のカリキュラムにおいてはライフキャリア科目に位置づけられ、全学の2年生以上を履修対象者として、関西学院大学で開講される「平和学特別演習『ヒロシマ』」との合同授業として実施される、宿泊を伴うフィールドワーク科目である。

この科目の2021年度のシラバスに記された授業目的は次の通りである。「原爆が投下されてから76年が経過し、原爆被害をめぐる問題は、多くの人々の関心から遠い

ているかのようなものである。しかし、ひとたび、関心を寄せれば、未解決のまま残されている多くの問題、この問題が現代社会にもたらした大きな影響に気付くことだろう。原爆被害に基づいて生まれた文化を取り上げ、ヒロシマの視点から、地域や国内外の諸問題(中でも、核廃絶をめぐる日本と世界の状況)に思いをめぐらし、地域でも国際社会でも、積極的に発言し行動する能力を養うことをめざす。この科目はライフキャリア科目の『社会との関係』科目群に位置づけられる。また、本学がディプロマ・ポリシーに掲げる『ぶれない個』、『多様性』の受容と共生への志向、『寛容と協働』の精神を、とくに本学や『ヒロシマ』の歴史との関わりの中から理解し、身につけることを目指す。」

1945年8月6日8時15分に炸裂した原子爆弾により、350余名の学生、生徒、教職員を失い、多くの生存者も被爆の苦しみや、サヴァイヴァーズ・ギルトを抱えて生きることとなった出来事を経て「人類の幸福は、戦争の本質をとらえ、核兵器の廃絶なくしては招来し得ないことを認識し、国家の枠を超えた相互理解と人類愛こそ希求されなければならない」²⁾ことを訴え続けてきた本学が、「広島に地がある、キリスト教主義大学の使命」として、開講してきた科目である。

* 広島女学院大学共通教育部門教授

この科目が関西学院大学との合同授業として開講されてきた経緯は、2003年に起きた「折り鶴放火事件」に遡る。当時同大学4年生として在学中であった学生が、原爆の子の像に献納されブースに納められていた折り鶴に放火し、14万羽を焼いた事件である³⁾。同大学ではこの件を真摯に捉え、謝罪や被害回復を試みたが、そのプロセスの中で合同授業の構想が実現していくこととなった。実は、この事件の直前から同大学では公益財団法人「広島平和文化センター」の協力を得て平和学習のプログラムを立ち上げる予定であったが、この事件の本質が原爆についての認識の風化にあると重く捉え、本学も加わるかたちで2004年に合同授業として結実したのである⁴⁾。以来、新型インフルエンザ流行による閉講となった2009年と新型コロナウイルス感染症の影響による閉講となった2020年を除き、毎年8月6日を中心に両大学の学生に向けて開講されてきた。

第1回時点では「ヒロシマの追悼行事への参加、ヒロシマをめぐる様々な視点を提示する講義およびグループ討論により、ヒロシマの歴史・現状を多面的に理解するとともに、平和について考え、発表する能力を養う」⁵⁾ことを授業目的として、座学とディスカッションを中心とした内容で展開されたが、その後フィールドワークの要素が加わるようになった。筆者が担当するようになった2015年度からは、およそ上述の2021年度シラバスに掲げたとおりの授業目的のもと、2回の事前授業と4日間の宿泊研修型の集中講義により、「1)座学とフィールドワークから、広島への原爆投下に至る歴史的経緯、被爆の実相、広島戦後のあゆみについての知識を得、他者に伝えることができる。2)『平和』とは何かという課題について自らの考えを持ち、発信することができる。3)ディスカッションを通じ、自らの考えを整理し伝えることの難しさや楽しさを経験するとともに、他者の意見に対して共感したり建設的に批判したりする力を身につける」(2021年度シラバスより)ことを到達目標として、座学・フィールドワーク・ディスカッション・発表による総合的な学修を目指してきた。

現在は筆者が授業担当者として全体の統括に責任を負いつつ、本学教務課の支援を受けてプログラムの運営を行っている。関西学院大学ではハンズオン・ラーニングセンターが開講の諸手続きや受講生募集を担当するとともに、職員が同行し当日の運営補助を行っている。

受講希望者は前期オリエンテーション期間内に行われる説明会に参加して受講申し込みをし、動機や目的などをもとにした選抜を経て履修に至る。その所属は学部、学科、学年とも様々であり(本学の場合は2年生以上だ

が関西学院大学は1年生から履修可能)、関心の持ち方もそれぞれである。本学のみならず関西学院大学からの受講生にも、広島や長崎出身で被爆3世の自己認識を持つ学生や、県内出身者、県外出身者と様々なバックグラウンドを持つものがおり、動機や目的においても、真摯に核廃絶を願うものや、現代の国際関係理解において不可欠の核の問題について認識を深めたいというもの、平和についてよく考える機会としたい、など多様な声を見ることができる。夏期集中講義(以下「研修」とする)では、これらの学生たちが6名前後のグループに分かれ、自ら立案した計画に沿ってフィールドワークを実施する。

その中で相互理解や人間関係を深めていく受講生たちは、宿舎に帰った後も、日中の座学やフィールドワークで得たものについて語り合い、最終日のプレゼンテーションに向けて考えをまとめるために議論を繰り返していく。時にはグループ活動が夜半に差し掛かることもある⁶⁾。座学とフィールドワークで出会うもの(人、建造物、出来事、空間、雰囲気、など)に加え、グループのメンバー相互もまたこの学びにとって不可欠な要素となっているのである。受講生たちは集中講義の間、出会う全てをリソースとした総合的な学びによって、研修の前後で大きな変化を経験していることが、例年、受講後の提出を必須としている最終レポートから伺われてきた。

3. コロナ禍での対応

前項に述べたような学びの形態は、コロナ対策下では実施することが困難であるため、2020年度は本学内での検討および関西学院大学との協議を経て閉講することを決断した。広島「原爆の日」である8月6日には、日本各地から、また世界各地から被爆地ヒロシマへと様々な関心をもった人が集まり、広島市の平和記念式典や、各所で行われる祈念式や慰霊祭、普段は入ることができない施設が開放されるなど、この時にしか出会うことのできない、ヒトやモノやイベントで、街には独特の空気感が広がる。まさにこの日、この時、この場所でなければ得られない学びがあるため、開講時期の移動については検討の選択肢とはならなかった。

2021年度は、本学内でコロナ関連の危機管理に責任を負うコロナ対策委員会(学長直轄の臨時組織)に開講の可否ならびに可とした場合の感染予防対策についての判断を仰ぎ、関西学院大学の側で全学的に整備された学生派遣に向けての条件やガイドラインを確認しつつ、筆者とハンズオン・ラーニングセンターの間で打ち合わせを重ね、開講を決断したが、感染症の拡大傾向および地域ごとの対策状況を注視しつつ、研修中止や閉講の可能性

も含みつつ準備することとなった。4月の募集で受講希望者は両大学合わせて71名おり、選考を経て本学より12名、関西学院大学より25名が受講することとなった（事情により受講継続を断念した者が関西学院大学に計6名おり、研修修了者は31名）。

全国のコロナ感染者数がやや低位に向かう中、第1回の事前学習は2021年5月22日（土）10：00～12：00、第2回は7月3日（土）10：00～12：00に行ったが、その後研修を予定する8月初旬が近づくにつれて感染者数は大きく増加傾向に転じ、関西圏でも大阪には8月2日（月）に緊急事態措置が発令された。しかし、本学ではコロナ対策委員会において、最大限の感染防止策を講じることを前提に、関西学院大学から研修生を迎えての研修実施を決断した。ただし、宿舎は完全に個室として夜間の会合は不可とせざるを得ず（そのため本学学生は宿泊せず自宅から通学とした）、さらにフィールドワーク活動の内容についても、不特定多数へのインタビュー調査は控えるなどの制限が課されることとなった。

このような状況下で、従来に劣らぬ学びの実現を目指して、様々なICTツール（とくにオンライン・コラボレーションツール）を利用した。活動内容自体に制限が加わったこともあり、コロナ前の学修体験を完全に補完することはできなかったが、逆にコロナ禍を奇貨としてオンライン・コラボレーションツールを駆使した新しい学修体験を創出することができた面もあった。次項ではその内容について詳述したい。

4. オンライン・コラボレーションツールという架け橋

（1）事前学習における展開

前述のとおり、研修の実施そのものも不透明な中ではあったが、宿舎や食事、会場の手配など、実施に向けてのロジスティックス面での諸準備を整えつつ、計2回の事前学習を行った。

事前学習の目的は、「ヒロシマの原爆」や核をめぐる現在の状況についての基礎知識や、主題に接近する上での視点の持ち方などを学び、研修期間中の限られた時間での学びが実りあるものとなるためのレディネスを形成することにある。従来は本学と関西学院大学で別個に実施してきたが、今回はオンライン会議システムであるZOOMを利用し、各自が自宅やキャンパス内の設備から接続することで、両大学の受講生が合同して受講することが可能となった。また、広島と関西のみならず、関西学院大学の内部でも上ヶ原キャンパスと三田キャンパスそれぞれの所属学生の地理的な隔たりを解消することに

もつながった。

第1回事前学習では「ヒロシマの原爆」の基礎知識についての座学を実施した後、ZOOMのブレイクアウトセッション機能を利用して6つのグループに分かれ⁷⁾、アイスブレイクとして、簡単なグループワークの後、授業担当者がGoogle Siteを使って作成したオンライン宝探し（ひとつのwebサイトに掲載されているクイズなどの課題を解くと次にアクセスすべきURLがわかる）にチャレンジした。

次の事前学習までの間に課題として、学生たちはそれぞれに「NHKスペシャル きこの雲の下で何が起きていたのか」（2015年8月6日放送）を視聴した。

第2回事前学習では、基礎知識に関する学びの続きと、現時点での日本と世界における核問題（核兵器のみならず「核の平和利用」の問題）を座学で学習した。その後、Google Jamboardアプリを使用して、各自が得た知識について、グループとしての整理を行った（38頁・図1）。Jamboardアプリの利点は、従来の対面授業やワークショップにおいてホワイトボードや模造紙と付箋紙を使用して行ってきたような作業を簡便にオンラインで実現することができること、Googleアカウントを持っていないメンバーでも参加可能なこと、Googleアカウントを持っているメンバーがいれば作業内容をクラウド（Google Drive）に保存していつでも呼び出しが可能なこと、などである。

このワークは授業時間内での完成を目指すことなく、研修実施までにグループで完成する課題とした。受講生にはグループごとに、一回あたりは短時間でよいのでグループミーティングを少なくとも2～3回行うように指示し、関係性を深めることを狙った。グループワークの進捗には授業担当者はあえて直接関与せず、随時Jamboardの内容を注視したが、介入を行う必要はなく、学生たち自身の手により質の高い学びの整理が行われた。

また、研修の実施にあたり解決しておかなければならない問題として、授業における共通の情報共有プラットフォームの設定があった。本学ではコロナ禍の状況下での遠隔授業の実施にあたってGoogle Classroomを授業マネジメントに用いて、資料の提供や課題の管理や学生との連絡に活用してきた。他方で関西学院大学では独自のLMSであるLUNA（Learning Unlimited Network for Academia）を構築して活用している。研修の実施に当たっては一元的かつ簡易に情報や資料の共有を行うためのプラットフォームが必要となり、ビジネス用メッセージングアプリであるSlackの活用を試み、大きな成果を得た。その内容と成果については後述したい。

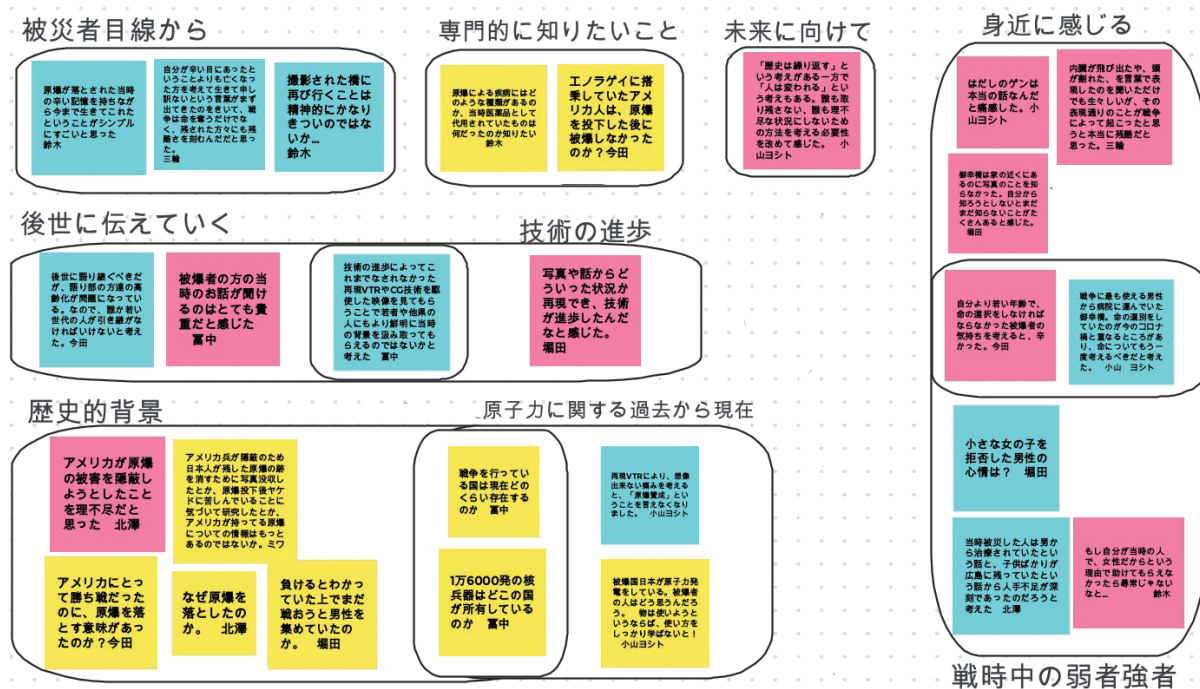


図1 Jamboardを使ったオンライン・コラボレーションの例

(2) フィールドワークでの展開

前述の通り、感染拡大の動向は予断を許さない状況ではあったが、8/4（水）より研修を開始した。プログラムは表1（39頁）の通り、平和記念公園の「碑めぐり」からスタートした。

「碑めぐり」とは、平和記念公園や周辺に70基ほど点化する記念碑（中には原爆ドームやレストハウスなどの被爆遺構やアオギリなどの被爆樹木も含む）の中から時間やテーマに合わせていくつかを巡り、その由来や建立に込められたメッセージを案内者が解説することを通して、被爆前後の広島状況について知識を得るとともに追体験し、また戦後復興や平和の問題について考えるきっかけとするものである。修学旅行など平和学習の導入においてしばしば組み入れられることのあるプログラムである。

今回は参加者間の距離を保ちつつ効果的に案内を進める方法として、案内者（筆者）による説明と碑の映像をライブ配信したものを参加者に各自のスマートフォンとヘッドセットで視聴してもらいながら、実際に平和記念公園内を歩くという形式をとった。炎天下での活動のため、感染症対策に加えて熱中症対策に留意する必要があったが、グループ単位でメンバー間の距離は一定に確保したうえで、さらにグループ間の距離は大きくとることとした。この形式により、従来から大人数での碑めぐりの際の悩みであった、均一に声を届けることが難しく説明が聴き取りにくいという難点を克服することがで

き、さらには肉眼では目視しにくい原爆ドーム上部の鉄骨の細部や内部のズーム映像、補足の画像資料も説明に自由に加えることが可能となった。

配信プラットフォームはYouTube LIVEを選択し、フリーソフトウェアOBS Studioを使用して、家庭用ビデオカメラからエンコーダー機器を経由してノートPCに映像を取り込み、徒歩で移動しながらライブストリーミング配信を試みた(39頁・図2).

この方法で行程半ばまで順調にプログラムを実施することができたが、最大の問題は機器の熱暴走であった。当日のプログラム実施までに数回のリハーサルを実施し、機器の動作や通信の安定性などについてチェックを繰り返し、問題点の洗い出しと対策を行ったが、中でも一番の難点となったのがこの点であった。外気温が36℃にも達する中、保冷剤を準備して臨んだが間に合わず、ストリーミング配信は断念せざるを得なかった。

次善の策として準備していた筆者のスマートフォンから ZOOM による配信に切り替えて継続したが、カメラによるズームや画像資料提供を断念せざるを得ない一方で、通信の安定性やタイムラグに関してはむしろストーリーミング配信よりも大きく改善し、解説音声の配信という点ではむしろ適している面があった。

(3) グループワークにおいて

碑めぐりの後は平和記念資料館の見学をグループ単位で自由に行うための時間をとり、夕刻に本学の教室に集合して初日のまとめを行うこととした。

表1 2021年度「ヒロシマと平和」研修日程

「ヒロシマと平和」・「平和学特別演習 ヒロシマ」日程表

		8月4日		8月5日		8月6日		8月7日		8月8日					
6:30	7:00					広島市記念式典 (参列不可) ※グループ行動	平和公園	フィールドワーク ※グループ行動	市内						
7:00	7:30														
7:30	8:00					移動				まとめ	HJU教室				
8:00	8:30														
8:30	9:00					広島女学院祈念式典	HJSホール								
9:00	9:30	集合 (平和記念公園)		集中インプット 特別講義1 宇吹暁先生											
9:30	10:00			屋敷	HJSチャペル					屋敷	HJU教室				
10:00	10:30	平和公園										集中インプット 特別講義2 宇吹暁先生			
10:30	11:00			準備											
11:00	11:30	碑めぐり		集中インプット 被爆証言講話 松本滋恵さん		フィールドワーク ※グループ行動	市内			発表	HJU教室				
11:30	12:00														
12:00	12:30	屋敷		集中インプット 特別講義3 西河内晴泰先生		移動									
12:30	13:00														
13:00	13:30	平和資料館 ※グループ毎見学		ワークショップ (視点整理・計画)		まとめ	ZOOM	まとめ	ZOOM						
13:30	14:00														
14:00	14:30	移動		ワークショップ (視点整理)											
14:30	15:00														
15:00	15:30	各自 (グループ毎)		各自 (グループ毎)											
15:30	16:00														
16:00	16:30	ワークショップ (視点整理)		ワークショップ (視点整理・計画)											
16:30	17:00														
17:00	17:30														
17:30	18:00														
18:00	18:30														
18:30	19:00														



図2 ストリーミング配信による碑めぐり

* 場面は学生たちがグループ単位で集まりながら、互いに距離をとっている様子。

集合後、事前学習で得た視点をもとに、碑めぐりと資料館見学で得たものについてグループごとにディスカッションを行ったが、その際には対面での対話や密状態を避けつつ、マスク着用の状態でも互いの声を聞き取るこ

とができるように、Google Meet による音声通話を併用した対面でのディスカッションを試みた。会場はパソコン教室であったため、受講者は卓上のパソコンまたは教室のwifi 経由で各自のスマートフォンから、グループご

とに立ち上げた Google Meet に参加した。ほぼトラブルなく接続が完了したが、関西学院大学の学生には初めて Google Meet を使う学生もいて、不便に感じた面がある様子がうかがわれる（42頁・図表1参照）。結局、距離を十分にとりつつ、肉声でのディスカッションを始めるグループもあった。

それぞれのグループ内でメンバーが得たものを共有できるように、授業担当者（筆者）からいくつかの観点を提示しつつ、制限時間を設けて自由にディスカッションを行い、その内容については各グループの代表から全体に向けて発表を行った（この際には Google Meet ではなく教室のマイク設備を使用した）。

その後各グループには、ディスカッションをもとに研修3日目午後と4日目終日にグループに分かれて行うフィールドワークの計画立案を指示した。仮にテーマを決め、それに沿って活動計画を立案し、Google Docs で作成し Slack を通じて配布したひな型に記入するよう課した。Google Docs 上に作成された活動計画はリアルタイムで授業担当者がチェックすることが可能という利点があり、計画上に無理がある場合や、欠けている視点がある場合など、授業担当者から各グループに随時 Slack やグループの Google Meet を通じた口頭でアドバイスを与えることができた。

計画立案にあたって参照すべき資料は事前にシラバスや各大学の LMS を経由して受講者に提示したものに加え、このグループワークの時間内にも授業担当者から各受講者へ Slack を経由して配信することができた（41頁・図3）。クラウド上に随時更新されていく活動計画を参照しながら、参考となりそうな情報について URL にコメントをつけて配信したが、Slack の優れた点として、URL の参照先のサムネイル画像が表示され、内容をうかがい知ることができることが挙げられる。Slack には各グループのチャンネルを設け、特定のグループに連絡や指示等がある際や、各グループから授業担当者に質問や連絡がある際に使うことにしたが、あえてクローズドにせず、受講生全員が参照可能な設定とした。他に「資料」というチャンネルを設け、授業担当者から全体に共有したい資料を配信することにしたが、受講生にも積極的にこのチャンネルを用いてフィールドワークで見つけた資料などを共有するよう勧め、ともすればグループ内でのみ完結してしまう共働関係が受講生全体に広がるように試みた。

（4）座学との関連で

研修2日目は座学を中心としたプログラムを組んだ。午前中はヒロシマ戦後史研究の第一人者である宇吹暁氏

（元本学教授であり、この授業の立ち上げに携わった）による講義により、「ヒロシマ」という語が社会化された被爆体験としての位置づけを得ていくプロセスを中心に、戦後復興と核廃絶運動の歴史について学んだ。講師が言及する豊富な資料のうち、レジュメに記載がなく、授業担当者が検索して見つけることができたものについては Slack の資料として受講生に配信し、後刻必要に応じて参照するよう促した。

午後からは自身も被爆者であり、在野の研究者として原爆文学の研究を続ける松本滋恵氏による被爆体験講話を伺った。講話は松本氏自身の体験に基づく貴重な証言に加え、被爆者の視点から捉えた戦中戦後史についての言及も含む重層的な内容であった。この講話は講師の許可を得て、学内外からの事前申込者に限定して YouTube LIVE によるライブストリーミングならびにアーカイブ配信を行った。

つづく講義は西河内靖泰氏（広島難病団体連絡協議会会長・元本学特任准教授）から原爆と差別をテーマに行われた。センシティブなテーマであるが、自身も被爆二世であり、被爆二世運動や障害者運動において運動家として、社会学者として差別の問題に取り組んでこられた経験と見識を、大部の資料を用いて示していただいた。この講演に際しては講師のプロフィールと当日紙媒体で配布した資料の pdf ファイルを Slack で配信した。

これらの講義の後に2日目の最終セッションとして、グループごとにフィールドワーク活動計画の点検と修正を行った。

（5）フィールドワーク

研修3日目の朝は各グループの自由とし、広島市平和記念式典の見学を促した。式典中は周辺が立ち入り禁止となるため離れての見学となるが、例年みられるデモ隊の喧騒⁸⁾と、静粛な式典とのコントラストを目の当たりにすることは大きなインパクトである。

その後は広島女学院中高ゲーンズホールに移動して、広島女学院平和祈念式典に参列後⁹⁾、各グループは前日までに作成した活動計画に最終チェックを受けて、それぞれの目的地へと向かった。研修4日目は終日、計画に沿ってフィールドワークを継続したが、この活動中も Slack を活用する場面が多かった。

まず、熱中症などの注意喚起と、メンバーの健康状態の把握、および活動の進捗状況の把握を兼ねて、各グループには Slack による定時連絡を課した。従来はグループワーク中に受講生やグループの状況を把握する手段は乏しかったが、Slack によってこれが可能となった。マスクを着用して長時間（炎天下の屋外も含んだ場所）



図3 Slack の活用例

活動することのリスクについては大きな懸念であったが、結果的にほとんど健康上の問題は生じること無くプログラムを終えることができた。

また、行程の変更にかかわる質問や相談についても、臨機応変に対応することが可能となった。あるグループからは、フィールドワークの途上で旧陸軍被服支廠の現地調査を行う中で、戦時下の日本の加害性について掘り下げた調査をしたいと考えるに至り、研修4日目である8月7日（土）の午前中の活動において、広島市内の踏査から戦時中にガスの製造工場があった大久野島を訪れることへと計画変更したいとの相談があった。授業担当者の経験からは半日では調査時間の不足が見込まれ、かといって終日大久野島で活動することは計画全体のバランスを欠くと判断したため、午後から予定している大和ミュージアム（呉市海事歴史科学館）の見学に合わせて、呉市に存在する歴史遺構を調査対象とするようアドバイスをを行った。結果的にこのグループは隣接する都市である広島と呉において原爆に対する受け止め方のみならず、軍事都市であった過去の受け止め方についても対比可能な特徴があることをつきとめ、興味深い発表を準備することができた。

また、8月7日（土）は他の多くのグループにとってのも計画の大幅な変更を迫られる日となった。広島市の

「新型コロナウイルス感染拡大防止のための早期集中対策」（7月31日（土）開始）を受けて平和記念資料館他市内の多くの原爆関連施設がこの日以降臨時休館となったためである¹⁰⁾。計画の変更に際しては各グループとSlackでコミュニケーションをとり、代替案を提示するなどの対応をとることができた。

研修3日目と4日目の夕刻、活動修了時にはZOOMを利用して全員参加でまとめのセッションを行い、それぞれのグループのフィールドワークの様子や見出したものを共有する時間とした。このセッションにはフィールドにいる者、休憩場所にいる者、すでに宿舎や自宅に戻った者など、それぞれの場所から参加し、ZOOMによるコミュニケーションの利点が発揮された。

（6）プレゼンテーション

研修最終日である8月8日（日）の午前中は各グループのまとめ作業のための時間を取り、午後からはグループ単位でのプレゼンテーションの時間とした。

それぞれのテーマは、1グループ「原爆の差別を知る」、2グループ「原爆と子ども」、3グループ「核のない社会実現のために市民社会に必要なもの」、4グループ「原爆による放射線の影響について」、5グループ「ヒロシマの二面性」、6グループ「原爆から学ぶ、知ることの重要性」であった。持ち時間を15分とし、Google Slide

または MS PowerPoint を使用しての発表を課した。いずれも事前学習、座学、フィールドワークで得た知識や経験を盛り込んだ、中身の濃いプレゼンテーションであった。

発表後には受講者からの質疑応答の時間を設けた。従来は加えて授業担当者からの短評や質問を行っていたが、Slack で全体に発信する形式に変えることで時間短縮をはかった。一方で、新たに Google Form を用いて発表グループ以外の受講者全員によるピアレビューを集めた（Google Form の URL 配信も Slack で行った）。ピアレビューの設問は名前、所属グループ、内容（10段階評価）、発表姿勢（5段階評価）、役割分担（5段階評価）、短評で構成した。短評については「無記名で全体に公開します。良い点はほめ、問題点は率直に（しかし励ましになるように）、自由に記してください。」としたが、趣旨にそった記述を得ることができた。集約した短評は授業担当者により即時に Google Docs に加工し、対象グループに共有を行った。ピアレビューの評価は成績評価の参考に活用した。

5. まとめ

研修終了後には受講生に Google Form を用いた振り返りを提出してもらった。記名式で設問は「今回使用したデジタルツールについて」、「感染症対策について」（感じたことや改善点などがあれば記入してください）、「熱中症対策について」（同）、「研修内容について」（気づきや前向きな提言をお願いします）とした。回答者数は25名で研修修了者数31名の80.6%であった。

デジタルツールについては「使いやすさ」と「役立ち度」を学生の主観で5段階評価（5が最高）してもらった結果、以下のとおりとなった（表中の数値は平均）。

	全体	HJU	KGU
ZOOM（使いやすさ）	3.68	3.33	3.88
ZOOM（役立ち度）	3.84	3.44	4.06
Google Meet（使いやすさ）	3.28	4.11	2.81
Google Meet（役立ち度）	3.16	4.00	2.69
Jamboard（使いやすさ）	3.36	3.11	3.50
Jamboard（役立ち度）	3.44	3.11	3.63
Slack（使いやすさ）	4.12	3.89	4.25
Slack（役立ち度）	4.32	4.22	4.38

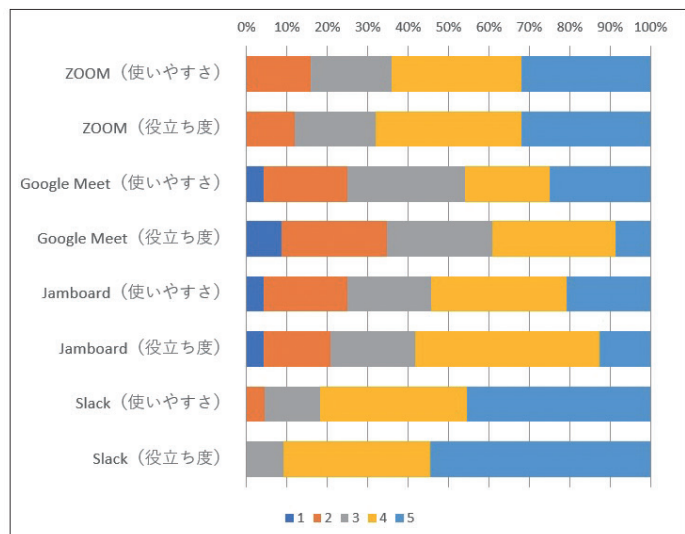
*表中のHJUは広島女学院大学、KGUは関西学院大学

Google Meet は関西学院大学の学生の多くにとって初めて使うツールであり、低い評価となった。一方で同様の機能の ZOOM については関西学院大学の学生に比べ広島女学院大学の学生がやや低い評価となり、当然のことながら普段使い慣れているツールに対して高評価がより多く集まる傾向がみられた。

しかし、使用頻度が大きかった Slack については大半の学生が今回初めて使用したツールであったが、実際に役立った場面も多く、「使いやすさ」と「役立ち度」ともに高評価となった。

研修については、以下のような意見が寄せられた¹¹⁾。

- 今回、初めて広島という地を訪れ、平和とは何であるのか、私たちに何ができるのかを見出すことができたと思う。貴重な体験に溢れたこの時間は、教員になりたいと思う理由がまた一つ増え、自分を前に成長させてくれたようにも感じる。広島という地や、原爆に向き合う時間を作ってくださり、考え、挑戦する場を掴ませて下さりありがとうございました。
- 研修をやる前とやった後では、自分でも驚くほどの変化がありました。これは受動的な学習と能動的な学修の差です。平和学習に限らず、今後の人生においても重要な、十分に価値のあるものだと思います。一時は困難もありましたが、関係する全ての人に大きく感謝します。本当にありがとうございました。
- とても有意義なものになりました。コロナ禍で行動が制限されることもありましたが、同じことを勉強しているメンバーが集まったことで、スムーズに



図表1 オンライン・コラボレーションツールの活用

テーマを決めることができ、内容を深く掘り下げることができたと思います。学習の場を設けていただきありがとうございました。他県の学生との交流ということもあり、広島で育った私とは違う新鮮な考えに触れることができ、大変勉強になりました。

- まず、原爆について学びたいと考える同世代の方々と出会えたこと、そのような機会を設けてくださったことに感謝しています。このようなご時世の中、貴重な講義や平和祈念式への参加など、私1人では決して実行することのできない研修内容で構成されていて、私の財産となる体験をすることができました。フィールドワークでは私たちが“広島に足を運んだからこそ学べること”を発見できるように様々なサポートをしてくださり、こちらの授業を履修することができてよかったと心から思えました。

コロナ禍に翻弄され、事前学習や課題に取り組む中で練り上げてきた活動方針やテーマに大きな変更を迫られたグループもあったが、各自工夫を重ね、従来の研修に比べても遜色のない成果を得ることができたことが伺われる。「8月6日のヒロシマ」でしかできないことと、コロナ禍でもできることの接点を、オンライン・コラボレーションツールを活用しつつ、学生たち自身が模索した成果であろう。

ここまで述べてきたように、2021年度の本学「ヒロシマと平和」と関西学院大学「平和学特別演習『ヒロシマ』」の合同授業における学びは、コロナ禍による大きな制約がありつつも、従来行ってきたように、8月6日を中心とした広島で出会う人やもの（建造物、出来事、空間、雰囲気、等）、座学で得る知識、研修に関わる全ての人（授業担当者、同行スタッフ、受講生相互）など、すべてをリソースとした学びとして展開することができた。当然ながらコロナ禍による制約によって失われたものをすべて補完することはできなかったが、ZOOMによるミーティングやSlackによるリアルタイムのコミュニケーションを通して学修体験の補強や、より細やかなサポートを試みることができるようになった。

今年度の研修はフィールドを訪れなければ成立し得ない学びであったと同時に、オンライン・コラボレーションツールの活用によってはじめて実現可能なものでもあった¹²⁾。それはVRやメタバースによって「現地」での体験を代替することではない。むしろICTを用いて体験を補完あるいは補強することの可能性¹³⁾への展望を見出すことができたと思括したい。

注

- 1) 本稿は、「第39回大学等におけるオンライン教育とデジタル変革に関するサイバーシンポジウム（教育機関DXシンポジウム）」での発題「『今・ここ』でなければならない学びを止めないために～8月6日のヒロシマから」（関西学院大学教務機構事務部ハンズオン・ラーニングセンター担当課長、内原朋嗣氏と共同）を、当日の質疑応答を踏まえて改稿したものである。
- 2) 『広島女学院百年史』、457頁。
- 3) 「折り鶴放火の大学生逮捕 14万羽消失」（『中国新聞』2003年8月2日）。
- 4) 「『核廃絶へ行動したい』関学大が広島で講座」（『神戸新聞』2016年8月6日）。この件については当時の本学院院长・大学学長であり、関西学院大学出身の西垣二氏が橋渡しに尽力したと伝えられる。
- 5) 『この10年の歩み』、157頁。
- 6) 宿舎での生活指導は主に関西学院大学ハンズオン・ラーニングセンターからの同校職員が担当し、学生たちの良き伴走者としての役割を担ってくださっている。
- 7) 従来は研修の初日にグループ分けを行ってきたが、今回は事前学習第1回目からグループ分けを試みた。
- 8) 8月6日には早朝から、全国から集まった反戦や反核を訴えるデモ団体や、ヘイトスピーチにあたる主張をする団体が大量で叫び、時には警備にあたる機動隊と衝突する場面も見られる。原爆の投下時刻に合わせて黙祷がさげられる8時15分には大半のデモ隊が静寂を守るものの、式典のさなかに続く喧騒に批判の声が寄せられてきた。このことを受けて広島市議会では検討を経て、2021年6月25日に「市は、平和記念式典を、市民等の理解と協力の下に、厳粛の中で行うものとする」（第6条2項）とうたう平和推進基本条例を可決した。しかし、デモを一律に規制することは表現の自由への制約ともなるため、条例の可決には批判の声も多い。また式典参加者の中からも「式典に参加していて『うるさい』と感じたことは一度もない。表現の自由もあり、特定の団体を規制するものにならないか疑いがある。条例で『厳粛』を強調されすぎること賛成しない」（広島県原爆被害者団体協議会理事長代行・箕牧智之氏のコメント、「『厳粛』とは？デモ制限に賛否」（『朝日新聞』2021年6月8日）との意見がある。
- 9) 本来は関係者に広く開かれた式典であるが、2020年度と2021年度はコロナ禍のため参列者を遺族や同窓生代表等に限って行われ、代替としてYouTube Liveによる配信が行われた。研修の受講生は特別対応として対面での参列を許可された。
- 10) 前述の大和ミュージアムは呉市の施設であり、8月7日（土）以降も開館していた。一方で平和記念資料館内のレストハウスは8月4日（水）からすでに臨時休館に入っていた。
- 11) この他、感染症対策については「マスクを外していても同じ方向を向いて食べることを徹底していたグループを

参考にして、黙食・できれば同じ方向を向いて食べることを意識し、感染対策をしていました.」,「各部屋での朝食や全員が同じ方向を向いて食べる食事は今のご時世特有のものです, 徹底的に行われていたように思います. もう少し手指消毒をする機会があっても良かったのかなとも感じました.」,「マスクは徹底していましたが、議論が白熱すると飲食中にも議論を始めてしまったのは反省すべきだと思いました. 今後、同じようなものに参加する際は気をつけたいと思います.」,「グループのみなで感染対策をきちんとし、今コロナが本当に身近な存在であるという危機感を改めることができた.」, 熱中症対策については「日傘をさしてもすごく暑くて、適宜涼むことの大切さを再確認しました.」,「できるだけ日陰を歩いたり、こまめに飲み物を飲むなど、熱中症対策については万全にできたと思います.」,「グループで行動する時に、自分たちのタイミングで休憩することも必要ですが、時間を設定して定期的に休憩や水分を摂るようにすると、定期的に休めることができます.」,「健康係を中心にグループの中で体調を確認していました. 特に改善点は思いつきません. 昼食時など塩あめも用意してくださってありがとうございました.」などの意見があった.

- 12) オンライン・コラボレーションツールの使用にかかわる否定的な評価としては、「碑巡りではスマホを使用しましたが、音声聞こえづらいことがあり、やはり限界があると感じました. しかし、どのように改善すればいいのか私は思いつかないので、コロナ禍では仕方ないと思いました.」,「Google Meet をこれまで使う機会がなく、少し戸惑ってしまったため ZOOM の方がスムーズに使うことが出来るのでは?と感じていました.」というものがあつた. 今後、活用の方法を工夫することで解決をはかりたい.
- 13) NPO 法人ピースカルチャービレッジらの実験的事業である、平和記念公園を巡りながら被爆前および被爆直後の同地区の様子を疑似体験するという試みは良い一例である（「被爆時の街, VR で学ぶ 広島, 平和公園でツアー始まる」〔『中国新聞』2021年8月1日〕）.

参考文献

- 広島女学院百年史編集委員会 編『広島女学院百年史』（広島女学院百年史刊行委員会, 1991年）.
- 広島女学院120年史編集委員会 編『広島女学院 この10年の歩み 1997-2006』（広島女学院, 2006年）.